

しかし主は仰せられた。「いや、確かにあなたは笑った。」

本日のテーマは「笑い」です。アブラハムの妻サラは笑ったことを隠し、それを神にとがめられました。この「笑い」の本質は何であるのか、笑いより大切なのは喜び自体であり、素直な喜びを分かち合うことの大切さについて、お話します。

笑いは、日常の緊張から解放するため、昔から生活に欠かせないものでした。落語は、江戸時代から続く芸能であり、庶民は笑って楽しめます。テレビをつければ、お笑い芸人がかならず出演し、笑いを与えて日頃のストレスを晴らしてくれます。笑いは健康にも良いともいわれ、笑いのある生活を続けていると、癌さえ消滅してしまうことがさえあります。ビジネスの世界では、気の利いたジョークをかわせば、難しい仕事もうまくまとまります。

しかし、笑いは時と場所をわきまえる必要があります。おごそかな場や、緊張した場面で一人が大笑いすると、周りの人は眉をひそめるだけです。

創世記の中のサラは、神の言うことを疑い、思わず笑ってしまい、それを隠しました。神は「あなたは確かに笑った」と、とがめます。それは神様から見れば、笑う場面ではなく、サラもわかっていたからこそ笑いを隠しました。

天界の教えは、笑いの本質は、真理への情愛か、偽りへの情愛であると、啓示します。そして、「通常の笑いの中には、それほど善ではないものがある」とさえ述べます（天界の秘義 2072）。

笑いは、善くないものを含んでいる、それでは笑いはすべて悪いものなののでしょうか？笑いには様々な効能があるはずなのに、いつも不謹慎なものでしょうか？

笑いを冷静に考えれば、笑いには、自分を低くして、相手の優越感をくすぐる、あるいは、相手を優越感から見下しあざける、といった、かならずしも善いとはいえない要素が含まれます。落語によく登場する八五郎・熊五郎は、常識を越えたまぬけさを繰り返し、一体どこまでおろかなんだろうと、客は笑います。創世記の中のサラは自分の年老いた身体を軽蔑して、自分自身を笑います。あるいはいかに神様でも、そんなことはできないと神様の力をみくびって笑います。そのため自分の笑いを隠しました。偽りへの情愛を見せたくなかったのです。

福音書の中でも、主がお笑いになったという記述はありません。新旧約聖書のみことばで「笑う」という言葉が含まれる節は約50カ所あり、そのうちほとんどが、軽蔑など、良い意味の笑いではありません。そこには、軽蔑・あざけりなど、何らかの偽りへの情愛が含まれます。

出エジプト記では、イスラエルの民の混乱と指導者アロンの無能を、敵が笑います。（出 32:25）

マタイの福音書にも、主イエスが死んだ娘をよみがえらせようとされ、「その子は死んだのではない。眠っているのです。」と言うと、会衆はそんなことがあるものか、とあざ笑います。（マタ 9:24）

そして、詩編には、神が笑う表現もあります。神に立ち向かおうとする地の王に対して、「天の御座に着いている方は笑い、主はその者どもをあざけられる。」(詩 2:4) とあります。

神様にも偽りへの情愛があるのでしょうか？神様は愛そのもの、知恵そのものです。偽りへの情愛などほんのわずかでも存在するはずはありません。悪い者にも善い者にも無限の愛を示されます。すると、この聖書の表現は、読む者のレベルに合わせた仮のみせかけ、外観といえます。神が怒られる、試練に合わせる、罰せられる、といった種類の表現です。愛そのものである神は、怒ることはありません。また神はお救いになるだけで、試練に合わせるのは別の存在です。地獄の罰は、悪魔同士の業です。読む者が、自分たちのわがままを抑え、神様を恐れさせるため、そんな表現をとり、全く別のことを語っています。これがみことばの内意といわれるものです。サラの笑いは、主イエスの成長過程における合理性の誕生とそれを神的にしてゆく過程の一場面が描かれています。地の王に対する笑いは、神と人間の力の差が無限であることを意味します。

😊 😊 😊

聖書の笑いのすべてに、偽りへの情愛が混じっているかということ、そうでない部分が、数カ所あります。エレミヤ書です。捕らわれ人が解放されます。そのとき、「感謝と、喜び笑う声わき出ます」(30:19)。またイスラエルが立て直され、「喜び笑う者たちの、踊りの輪に出て行」きます(31:4)。新約聖書では山上の垂訓の中で「いま泣く者は幸いです。やがてあなたがたは笑うから。」(ルカ 6:21) と主が語られます。いずれも喜びの表現としての笑いです。解放や、教会の再建、悲しみの終わり、そこでの素直な喜びが笑いとなって出ています。ここには優越感やあざけりなど、偽りへの情愛は全く感じられません。

心からの喜びが、にじみ出た笑顔は、相手の心にも染み渡り、相手にも喜びが写ります。

生まれたばかりの新生児は笑いません。赤ちゃんは、泣いて飲んで寝る、泣いて飲んで寝る、の繰り返しです。産婦人科の新生児室は赤ちゃんの泣き声にあふれています。悲しくて泣いているのではなく、赤ちゃんの泣き声にあふれた姿が、産院の健全な姿です。生まれたばかりの赤ちゃんが、そろって大笑いする部屋は、かなり不気味な情景です。

新生児が笑い始めるのは、生後2ヶ月めから6ヶ月目の間で、赤ちゃんの笑いは、親が教えると言われています。親の笑顔を見て、まねて笑います。その真偽はわかりませんが、昔、子をあやしてもなかなか笑い初めてくれないなという時がありました。しかし、頭の上に抱き上げて笑いかけると、初めて笑顔を見せてくれました。親として本当にうれしかったことを覚えています。その時、親の私の顔も笑っていたはずです。子は、親の笑顔を見て笑い、親も、子の笑顔を見て笑います。喜びが循環します。妻に話すと、もちろん喜んでくれます。喜びは広がってゆきます。大笑いはしなくても、喜びと笑顔に包まれます。では先天的に目に障害のある赤ちゃんは笑わないかということ、そうではないと医者話にありました。ではどうやって笑いや喜びを伝えているのでしょうか？

Cf.「こどもは未来である」(小林登著・メディサイエンス社)

喜びが伝わることを説明できる可能性があるのは、「スフィア」という教えです。スフィアは雰囲気、オーラ、色、波動など様々な表現があります。喜びのスフィア、悲しみの色、怒りのオーラなどで

す。怒りのスフィアに包まれた人のまわりは、とげとげしく、息苦しくさえなります。

このスフィアは、その人の人格そのものと言われています。人の愛と、そこから生まれる情愛が本人から絶えず発生して、周りにスフィアとなって感じられます。人を嫌ったり、贅沢を好んだり、欲深かったり、いかがわしい目で異性見る人は、悪いスフィアを発生させます。そしてそのスフィアは、地獄の悪魔の出すスフィアと同じで、その人は死後、同じスフィアを持つ悪魔のいる地獄に向かいます。

隣人を大切にし、実際に手をさしのべようとする人は、主への感謝と喜びのスフィアに取り囲まれています（天界の秘義 4464 参照）。このスフィアは天界の天使とつながり、天界の天使とつながりのある人は死後、天界に向かいます。

天界は人の内側にあり、人の情愛が、内に向かい、その情愛が完全であればあるほど、遠くに広がるという現象があります。そのため、これら内側に向かうスフィアは、コミュニケーション・伝達の役目も果たします。それは内側に向かえば向かうほど、完全となって広がってゆくからです（天界と地獄 49 参照）。深く内に向かえば、天界とつながり、より深く内に向かうなら天界全体とつながります。

偽りの情愛は、内ではなく、外に向かい、あまり広がりません。喜びが広がるときは、思考が広がるのではなく、楽しい雰囲気や、喜びのスフィアによって広がります。いい笑いは結果であり、心の喜びが原因です。聖書の中の、いい笑いは必ず喜びと共になっています。先に喜びがあり、笑いとなって表現されています。真理への情愛は、笑いとして現れますが、「その真理への情愛の魂、ともいえる部分は、実は善への情愛です。」（天界の秘義 2072）「この善への情愛は、笑いによってではなく、喜び、歓喜として現れます」。

善への情愛から出た喜びがスフィアとして伝わり、それが時に真理への情愛となって、いい笑いとなります。作り笑いや愛想笑いは広がりません。作り笑いをする集団の中にいれば、なにを企んでいるのだろうと、不安になってきます。また軽蔑やあざけりの笑いもそうです。そこにはいたくなります。しかし、喜びのあるスフィアには、留まりたくなります。この喜びのスフィアを作り出すためには、隣人のことを深く想い、隣人によかれと深く願うことです。物理的には何も出来ないこともあるでしょうが、その深い想いはスフィアとして伝えられます。外に向かわず、内に向かうことで善への情愛が喜びのスフィアに変化します。この喜びが相手に伝わり善への情愛を持つようになれば、相手にも喜びが生まれます。そしてそれを深めれば天界を経由してより大きくつながります。天界を介して、主を介して人とつながることができる、素敵なことではないでしょうか。これが私たちの求める教会です。

喜びや感謝を分かち合うよう、主がお求めになっています。主はいたる箇所で、「喜びなさい。喜びおどきなさい。」とお命じになっておられるからです。主がお救いになった人間に対して、恩着せがましく、「喜べ」とおっしゃっておられるではありません。主はご自身のお持ちの真の喜び、隣人をいたわり、大切にし、尽くすこと本物の喜びを分かちあい、すべての人に味わせたいのです。その人

間が本物の喜びを味わっているのをご覧になること、これが主の最大のお喜びです。  
あなたが、本物の喜びを味わい包まれること、それが主の最大の幸福です。

そしてこの喜びは、天使達の間では笑いではなく、別のもので表現されます。  
それは歌と踊りです。本当にうれしいことがあったとき、ふと口から歌がもれてしまうことがあります。礼拝に賛美歌が欠かせないのは、そのためです。また、うれしいことがあると、体がうずうずして、じっとしてはいられなくなります。ついには踊りだします。

天界の教えにはこうあります。

「歌うとは、心の喜びを表に出すことです。心の喜びが満ちてあふれ出すと、喜びは自らを歌として表現します。・・・思考の喜びが、歌詞に、心の喜びが、ハーモニ・和音によって表現されます。この喜びの大きさは音の上昇によって表現されます。これらはまるで喜び自体から自然に出てくるように、あふれ出ます。」(黙示録解説 326 参照)

心の内側からあふれ出る喜びは、自然と歌となります。一人で歌うカラオケは健康やストレス発散に良いものですが、これは自己満足のおいがします。天使たちが楽しむのは、大勢の声を調和させるコーラスです。礼拝の賛美歌で大切なのは、心から喜び歌うことです。そして、自分の喜びを叫ぶだけではなく、人の喜びを自分の喜びとします。人の喜びに耳を傾け、自分の喜びをそれに和する形で歌い上げます。すべての人が、主に救われ悪から解放され、隣人や友、そして主に仕える喜びを、調和したコーラスとして高く高く歌い上げるのが、天界のコーラスの姿です。聖書には「歌」という語は約260カ所、取り上げられています。「笑い」の5倍以上です。

踊りについては、古代においては、心の喜びは、楽器や歌だけではなく、踊りによっても明らかにされたという、天界の教えがあります。(天界の秘義 8339)

ダビデも神の箱が「ダビデの町エルサレム」に向けて運ばれようとしたとき、「力の限り踊り」しました。日本の神楽も、神の前で上手に踊る事が大切なのではなく、感謝と喜びの表現として踊るのが正しい姿です。

笑いがすべて良いとはいえないのは確かですが、笑いを無理に抑えるのではなく、喜びを深め、自然にそれがあふれ出て、また相手の喜びを自分のものとして感じる事が大切です。自分を縛っていたものから解放される喜び、家族や友や社会や国家、そして教会や主に仕える喜び。この深い喜びは周りにも伝わり、素直な笑顔や、歌や、踊りとなって現れます。善への情愛が心の真ん中にある事が大切です。悪から解放され、利己的な自分から解放され、隣人に仕える喜びです。あなたが真に喜ぶことが、主の最大の喜びです。あなたのこの喜びが、心からあふれ、友の喜びを自分の喜びとして、笑い、そして高らかに歌いあげましょう。

「ハレルヤ。エホバに新しい歌を歌え。聖徒の集まりで主への賛美を。」(詩 149:1) アーメン

創世記 18:9-15

ルカ 6:20-23

天界の秘義 2072 (アルカナ訳)

「笑い」とは、真理への情愛を指します。これは、笑いの起源と本質から分かります。笑いの起源は、真理への情愛か、偽りへの情愛です。そこから快活や喜びが、笑いとして顔に現われます。笑いの本質は、それ以外には存在しません。

笑いは、顔面という肉体上の外部にあります。ところで、〈みことば〉では、内部は、外部によって表現され、意味されます。顔は、魂や精神にある内面の情って打ち消した。恐ろしかったのである。しかし主は仰せられた。「いや、確かにあなたは笑った。」

愛をすべて表わします。耳は、内心の傾聴とか、従順を表わし、目は、内的視力または理性を表わし、手や腕は、能力や力を表わします。それと同じく、笑いは真理への情愛を表わします。

② 人の合理性の中で、その中軸になっているのが真理です。その真理の中に善への情愛もあります。しかし善への情愛は、真理への情愛の中にあり、その魂のようなものです。合理性の中にある善への情愛は、笑いによって表わされるのでなく、むしろある種の〈よろこび〉によって表わされます。したがって、笑いにはならない快の〈よろこび〉によります。なぜなら、通常の笑いの中には、それほど善ではないものが何かあるからです。……